

特集

江戸・京の53宿と大津・大坂の4宿

東海道57次

三条大橋

髭茶屋追分

大津宿

中略

坂下宿

関宿

亀山宿

伏見宿

淀宿

枚方宿

守口宿

高麗橋

古くから東西文化が交流する地として、また、東海道・伊勢別街道・大和街道が交わる地として、街道文化が育まれ、今なお息づく亀山市。江戸時代に東海道に置かれた亀山宿・関宿・坂下宿の3宿には、今も歴史的建造物などが現存し、全国的にも価値の高い歴史的資産として受け継がれています。

東海道は、江戸から大坂まで続き、57の宿場がありましたが、江戸時代後期、浮世絵師の歌川広重が描いた『東海道五拾三次』が好評を博したことで、江戸から京までの東海道53次が広く知られるようになりました。しかし近年、江戸から大坂までの東海道57次が再認識され、街道沿いの地域に新たな交流が生まれつつあります。

亀山3宿の役割や存在意義に改めて触れながら、東海道57次の魅力を感じてみませんか？

問合せ先 商工観光課観光・地域ブランドグループ ☎ 84-5074
文化課まちなみ文化財グループ ☎ 96-1218

東海道57次とは？

東海道といえば、江戸（日本橋）から京（三条大橋）の「53次」が広く知られています。しかし、東海道には57の宿場がありました。江戸幕府は、西国に配した外様大名が参勤交代の途上で朝廷と接触することを禁じていたため、東海道も京の市中を通らない伏見への迂回路が必要となりました。そこで、淀川の堤防上に新たな道を整備し、その沿道に伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿の4つの宿を設けました。この4宿が加わったことで、東海道は大坂（高麗橋）までの「57次」として延伸されました。

東海道53次と東海道57次の比較

	53次（江戸～京）	57次（江戸～大坂）
街道の目的	将軍と朝廷を結ぶ政治・軍事的に整備された道	商都・大坂まで続く経済の大動脈
宿場の特徴	情報と物流に合わせて参詣などの往来が中心	水上交通と一体化した物流拠点
終着点	京（三条大橋）	大坂（高麗橋）

*「次」とは…街道筋に置かれた「宿場」のこと。江戸時代、公用の旅人や荷物を宿場から宿場へ人馬を交代させながら送り継いでいたことに由来しています。

【画像提供】東海道五十七次御宿場印帳事務局

知れば知るほど 旅したくなる東海道57次



東海道町民生活歴史館
館長 志田 威さん

Profile
静岡県出身。JR東海専務取締役、JR東海不動産社長を経て、蒲原宿に東海道町民生活歴史館を設立。江戸期から昭和前期の町民生活や宿場・街道を紹介しながら、講演・執筆活動続ける。朝日大学客員教授、恵那市観光大使を務める。主な著書に「東海道57次」(ウェッジ社)などがある。

実は東海道は57次だった

徳川家康は、関ヶ原の戦いに勝利すると、翌年の慶長6(1601)年、江戸から京に40程の宿駅^{しゆくえき}を選定し、隣宿への継立^{つぎたて}※を命じました。これが東海道宿駅伝馬制の始まりです。豊臣家滅亡後、江戸幕府2代将軍・秀忠は西国の外様大名を監視するため、大坂城再建など体制強化を進め、大津以西で東海道を分岐させ、大坂までに4宿を設けました。さらに、3代将軍・家光が寛永元(1624)年に庄野宿を新設したことで、京へは53次、大坂へは57次となりました。

歌川広重の浮世絵により53次は広く知られていましたが、幕府役人や商人が往来した延伸4宿は一般にほとんど伝わっていません。しかし、幕府作成の東海道分間延絵図や東海道宿村大概帳には大坂までの道筋が記されており、57次は後世に伝えるべき重要な史実で、学びの深い街道でもあります。

延伸部4宿が見せる新しい東海道の魅力

東海道の延伸部は、古代から明治維新までの歴史と文化を伝える街道で、淀川舟運との深い関係や53次との違いも学べるなど興味深い区間です。伏見稲荷、與杼神社、石清水八幡宮などの歴史的社寺に加え、鳥羽伏見の戦いや幻の大坂遷都跡など維新期の史跡も多く、東海道観光に特別な魅力を添えています。伏見宿から大坂は平坦で、京阪電車がほぼ並行するため、初心者や高齢者でも安心して散策できます。

延伸部4宿との連携は有意義で、相互の情報発信により街道全体の活性化が期待できます。従来の観光に57次という歴史的要素を加えることで、地域の新たな魅力創出につながるはずです。

57次が広げる亀山の観光力

宿場や街道が小・中学校の教科書で詳しく扱われなくなり、若い世代の関心が薄れていることは誠に残念であり、今後は若年層への発信が大きな課題です。幼少期から歴史に触れられるよう、57次を丁寧に紹介することが重要でしょう。また、高齢者には健康づくりとして57次の散策を楽しんでいただくことで、東海道全体の振興にもつながると思われます。

櫓内部を公開する亀山宿、往時の面影が残る関宿、本陣の一部が残る坂下宿など、亀山3宿には豊かな歴史と文化が息づいています。遠方からの誘客やインバウンドも視野に入れた連携を広げることで、亀山市の観光振興だけでなく、57次の活性化にも寄与すると考えています。

※継立…宿場ごとに人足や馬を替えて、旅人や荷物を次の宿場へと送り継ぐこと。

東海道が結ぶ新たな絆

「東海道57次」で広がる亀山の魅力

令和6年に発足した「東海道57次区市町連携協議会」(事務局:静岡市)は、東海道57次の沿線自治体による広域連携組織です。歴史や文化、食などの地域資源を生かしながら、地域一丸となって誘客と活性化に取り組んでいます。

亀山市もこの協議会に参画し、亀山宿・関宿・坂下宿の魅力を広く発信しています。これまでに、「蒲原宿場まつり」(静岡市)へのブース出展や蒲原宿での「東海道57次宿場パネル展」、「淀川を繋ぐ 東海道五十七次フェスタ in 枚方」(枚方市)へのブース出展など、宿場町同士のつながりを深める交流事業を数多く展開しています。今後はさらに連携を強め、新たな視点を取り入れた誘客や広域観光の振興、地域をめぐる周遊促進へとつなげていきます。



商工観光課
観光・地域ブランドグループ
グループリーダー
堀切 雅代

4宿(伏見宿・淀宿・枚方宿・守口宿)と亀山のつながり今昔

いま むかし

① 伏見宿 水運と城下町が育んだ京の玄関口



東海道は、大津宿を過ぎると京と大坂へ道を分け、そのうち大坂方面へ向かう最初の宿が伏見宿です。伏見は、宇治川が巨椋池へ流れ込む水辺に位置し、古くから京・奈良・近江・大坂を結ぶ水陸交通の要衝として発展してきました。

豊臣秀吉はこの地に伏見城を築き、周辺に城下町を整備しました。秀吉の没後も、江戸幕府が京に二条城を整備するまでは上方における幕府の拠点として、慶長6(1601)年に宿駅制度が整えられた際には、関宿や坂下宿の役人が伏見で幕府から伝馬役務を定めた「駒の朱印状(宿場への公式命令書)」を受け取っています。伏見城の廃城後は、町は京の外港をもつ商業都市としての性格を強め、伏見は東海道の宿場に位置付けられました。



【画像提供】伏見百景編集委員会

② 淀宿 京を支えた城下町・宿場町



淀川は、琵琶湖を水源として大阪湾へそそぐ大河で、木津川・桂川と合流する周辺は、古くから水上交通の要地として知られていました。この地に豊臣秀吉が築いた淀城が廃された後、元和9(1623)年に新たに淀城が築かれ、淀川を挟んで整備された城下町が淀宿です。

淀宿は、東海道の宿場であるとともに、淀川水運を担う淀船の拠点としても発展しました。淀城は、京と大坂を結ぶ重要拠点であったことから、歴代藩主には譜代大名が任じられました。このうち、石川憲之と松平乗邑は、亀山から淀へ転封(領地替え)しており、石川家はのちに再び亀山藩主となって明治を迎えました。そのため、歴史博物館が所蔵する石川家関係資料には、淀城の絵図など淀宿ゆかりの史料も含まれています。



③ 枚方宿 街道随一の旅籠のにぎわい



枚方信用金庫
会長
吉野 敬昌さん

歴史街道がつなぐ、新たな地域交流のかたち

古くから淀川舟運の要衝として栄えた枚方宿を拠点とする当金庫は、東海道53次との歴史的つながりが地域交流へと広がるべく、独自の宿場文化が息づく関宿を令和8年3月に訪ねました。往時の面影を色濃く残す美しい街並みを歩き、地域が歴史を大切に守り継ぐ力強さを実感しました。

地域密着型金融機関として、この街道交流を単なる観光に終わらせず、互いの文化や魅力を結び合わせることで、持続可能な地域活性化へとつなげていきたいと考えています。

宿場町が紡ぐ歴史と交流を未来へ

当金庫が事務局を担う「東海道五十七次御宿場印プロジェクト」は、枚方宿や関宿をはじめ、沿線に息づく歴史文化を現代へと紡ぎ、新たな人の流れと広域的な交流を生み出しています。東海道にとって節目となる寛永行幸400年を迎える今年、地域密着型金融機関として各宿場や地域の皆さんと手を携え、歴史的価値の発信と観光振興に力を尽くしてまいります。

街道が育んできた文化を次世代へ継承し、にぎわいあふれる豊かな地域社会を共に創り上げていきましょう。



【画像参照】枚方市ホームページ オープンデータ
枚方宿鍵屋資料館、枚方市、クリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示-改変禁止 2.1



4宿と高麗橋で
「東海道五十七次御宿場印帳」を
販売しています!
御宿場印を集めながら東海道の
新たな魅力を発見してみてください。



④ 守口宿

大坂への入口を担った最後の宿場町



守口市市民生活部
生涯学習・スポーツ振興課
課長代理
岡田 光央さん



宿場町からにぎわいを創出する

守口宿は、文禄5(1596)年に豊臣秀吉が築いた文禄堤を基盤に、大坂への入り口を担う東海道57次最後の宿場町として発展しました。陸路の整備に加え、淀川水運とも結び付いた交通の要衝として、人・物・文化の往来を支え、商業と生活が息づく町として歴史を重ねてきました。

現在は、宿場の面影を伝える旧徳永家住宅を活用し、歴史的景観の継承とともに、市民や来訪者が集い、多世代が交流できる場づくりや地域の回遊性の向上に取り組んでいます。また、テナントによる営業やイベント開催を通じて、地域コミュニティの形成を促し、にぎわいの創出にもつなげています。こうした活動を通じて守口宿の魅力を広く発信し、亀山3宿をはじめ東海道57次の宿場町との連携を深めることで、地域間交流と歴史文化の継承をさらに推進していきたいと考えています。



文化課
まちなみ文化財グループ
亀山 隆

全国初認定「亀山市歴史的風致維持向上計画」

「歴史的風致維持向上計画」は、平成20年施行の「歴史まちづくり法」に基づき、歴史的建造物や祭礼・生活文化が形づくる風致を守り育て、都市の魅力として高めるための地域計画です。国の認定を受けることで、さまざまな支援が受けられるようになります。亀山市は、関宿のまちなみ保存などの取り組みを踏まえ、同法施行に伴い計画を策定し、平成21年1月に金沢市・高山市・彦根市・萩市とともに全国初の認定を受けました。

「亀山市歴史的風致維持向上計画」は、東海道を軸に亀山宿・関宿・坂下宿の3宿を一体的に捉え、東海道や大和街道などの沿道における街道文化を磨き上げながら、まちづくりを進める点が特徴です。この計画に基づき、亀山城多門櫓の復元修理や関の山車会館の整備など、歴史的資産を生かした文化財保護とまちづくりを一体的に事業展開してきました。

東西の文化が交わる「亀山3宿」

亀山市域の3宿は、西日本と東日本の境界域に位置し、江戸と上方の文化が行き交う地として発展しました。さらに、東海道から分岐する伊勢別街道・大和街道・巡見街道により、江戸から伊賀・奈良、上方から伊勢神宮へ向かう要衝でもありました。

東海道の難所とされた鈴鹿峠には、鈴鹿馬子唄や孝子万吉の逸話が伝わり、斎王の群行、立烏帽子、大嶽丸の伝説など、古くから文学や物語の題材として人々に親しまれてきました。こうした重層的な歴史と文化が、亀山3宿の魅力を形づくっています。

★ 高麗橋

東海道57次の終着点



高麗橋は、豊臣秀吉が大坂城の拡張工事に際して開削した外堀(現在の東横堀川)に架けられた橋です。江戸時代には、西詰に制札場、東詰に銀座が置かれ、一帯は大坂商業の中心地としてにぎわいました。また、この橋が東海道や西国、紀伊方面への距離を測る起点とされ、東海道57次の終着点として重要な役割を果たしました。

慶長19(1614)年の大坂冬の陣では、後に亀山藩主となる石川家当主であった石川忠総がこの高麗橋で激戦を繰り広げました。当時、忠総は、実父・大久保忠隣(おおくぼただなり)の失脚に伴い謹慎中でしたが、特別に参陣を許され、大坂の陣での功績によって譜代大名としての地位を確固たるものとししました。現在の高麗橋は、昭和4(1929)年に架け替えられたものですが、東詰にはかつての距離の基準点であった里程元標跡の碑が建てられ、東海道57次の歴史を今に伝えています。



明治3(1870)年に架け替えられた高麗橋。大阪初の鉄橋で「くろがね橋」とも呼ばれた。

「国立文化財機構所蔵品統合検索システム」
(https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/R-564)を加工して作成

4宿を巡りながら、
改めて東海道の魅力を
感じてみませんか？

昔の人・モノ・カネの流れを想像し、当時の交流と今につながる歴史の息づかいを楽しんでください。

今回の特集記事について
感想をお聞かせください!

